

「2025年度ベトナム国家大学ハノイ校サマープログラム派遣参加報告書」

京都大学工学部1年 陰山 莉愛

このプログラムでの最大の収穫は、現地に行って調べること、体験することの重要性を実感できたことです。研究テーマについて日本で行なっていた考察は、ベトナム人学生の証言や現地で見えた光景によって一瞬で覆りました。さらに、文献で学んだベトナム・ハノイの建築や宗教観は、正確な情報であっても半分程度しか実感として理解できていなかったのだと気づかされました。これまでは、建築に限らず様々な分野の学習において、2次元の情報ばかりで満足していることが多かったのですが、空間体験からえられる情報量はそれをはるかに凌駕していました。

また言語の壁があるからこそ、直接的に表現したり、相手の意図を汲み取ったりする中で友情を築くことができました。学んだベトナム語を、友人や店員とのやり取りで使うことで会話が円滑になり、より深い交流につながりました。会話を楽しむためにはやはり言語の壁を取り払う必要があると強く感じました。さらに、日本語で堂々とプレゼンするベトナムの学生に感動し、自分も精進しようと思いました。ベトナム語を現地で学び使う中で「言語は使ってこそ自分のものになる」と再認識し、今後は長期留学にも挑戦したいと考えています。

ベトナムでは、観光資源とよばれるほど大量のバイクが走っており、歩道にまであふれ出しています。当初は横断時に次々と迫る車やバイクに恐怖を覚えましたが、次第に慣れて一人でも大通りを渡れるようになりました。この他にも日本との違いを多く感じましたが、繰り返し体験すると不思議と受け入れられるようになります。私達はしばしば他国との違いに驚き、理解できないとさえ感じるがありますが、案外に人は異なる環境に順応できるのだと実感しました。

今回のプログラムでは、ULIS でベトナム語を学び、日本語を学習している学生と交流し、USSH ではベトナムの政治制度や大衆文化、文化人類学などについて講義を受けました。さらに、Trang An やドウオンラム村を訪れ、ベトナムの地域ごとの特有の魅力を知るとともに、学生同士の距離がいつそう深まりました。さらに USSH での最終日には共同発表を行いました。現地の学生の方が私たちを夜遅くまで案内してくれたり、学校内でツアーを企画してくれたりしたため、想定よりも準備時間が限られましたが、直前の数日はみんなで徹夜し、どうにか乗り切って良い発表を行うことができました。現地でしか得られないデータを生かした発表にできたと考えています。

もともと私はハノイの建築に興味があったのですが、実際に訪れてみると、思った以上に混沌とした世界に感動しました。熱帯地域に見られる壁や窓の少ない建築は、寄生するようにエネルギーな植物で覆われ、まるでファッションのように自由なファサードを持つ建物がひしめきあっていました。それは街全体のエネルギーと呼応し合っていて、建物が人と外界を分けるのではなく、むしろその間をグラデーション的につなぐ空間として機能していました。こんなに自由な街並みを経験したのは初めてで、ランドスケープとそれにかかわる文化や経済など地域の特色についてこれから学んでいきたいです。この体験は近年よく語られる「呼吸する建築」について再考するきっかけになりました。